

## 名誉会員の推挙に寄せて



### 牧里 每治 新名誉会員

#### 【本学会役員歴】

- 第20期 理事（3年）
- 第21期 理事（3年）
- 第23期（第2期）理事（2年）
- 第24期（第3期）副会長（2年）
- 第27期（第6期）監事（2年）



役員通算5期（12年）

身に余る光栄に預かることができ、名誉会員として推挙、承認決定いただきました会員の皆様をはじめ、理事役員の方々に感謝申し上げます。記憶に誤りがなければ、1973年度に入会して、およそ半世紀にわたって本学会に所属させていただいている。上智大学で開催された第21回大会で発表するにあたって、慌てて入会手続きを取ったように思う。当時大学院2年生ではあったけれど、修士論文執筆の構想を練る中で、五里霧中のなかにあった研究テーマの意義を確かめたかったのだろう。「コミュニティケア概念における予防機能」について発表したと思うが、発表会場には阿部志郎先生、三浦文夫先生、嶋田啓一郎先生などがおられて、無我夢中で何を話したのかまったく思い返せない。忘れられない思い出である。

振り返れば、2001年度から理事、副会長、監事など役員を務めさせていただき、その功労をねぎらって名誉会員の称号を授与してくださったのだと推察する。通算すると、理事4期、監事1期のおおよそ12年間役職を務めさせていただいたことになる。理事着任早々に大橋謙策会長の下で、科学研究費助成の申請に関する社会学分類からの独立への働きかけの結果、社会福祉系学会所属の審査委員を選出できる成果をえたことは待望の喜びだった。この間、学会50年史（『社会福祉学研究の50年～日本社会福祉学会のあゆみ～』ミネルヴァ書房、2004年）の編纂にも担当理事として携わらせてもいただいた。関西部会史の執筆も担当したが、部会事務担当が大学間の輪番制であったことと、部会活動の記録や資料も会員個人に託されていたためか、記録、資料とも紛失が多く、まとめるのに苦労したことを覚えている。そのほか学会事務所の四谷への移転とか、その後の社団法人化で忙しくなったことも大変だったけれど、懐かしい思い出になった。日本学術会議の連携会員も親学会の本学会が中心となって選出派遣している形であったようで、学術報告を出すための研究会やシンポジウムもやりがいのある学術活動であったように思う。現在は少しやり方も異なっているが、日本学術振興会のいわゆる科学研究費助成の審査委員も日本学術会議から推薦していたように、学会の役員を引き受けると学術系の役職が次々と委嘱されてきて予想外に忙しくなる体験も味わった。

最後になったが、年会費免除など厚遇していただけることは有り難いが、学会財政を思うと心苦しいという思いも去来する。選挙権も被選挙権も無くなるが、枯れ木も山の賑わい、名誉会員として社会福祉研究の奥の深さ、広がり、多様さ、面白さを伝承する役割くらいは担えるかなと考えている。